

**社会福祉法人 種の会
コンセプトブック
理事長 片山 喜章**

創始理念

子どもの立場を尊重し、新しいかかわり
(「大人と子ども」、「大人どうし」、「子どもどうし」の関係性の再構築)
を創造するための施設にする

園長理念

みんなが一丸となって取り組み、新たな保育の意義を創造し、理解し合う園にする



子どもを育てる・考え方 3

子どもの本当の気持ちを知るために
導きながら見守ることの大切さ

子どもを育てる・環境 7

自分の選んだコーナーで遊ぶ
異年齢で活動する時間もあります
サーキット運動を毎日しています
自然のもの、本物にこだわります

主体的に行動できる子どもに

大人たちの責任 14

保育士のみなさんへ
 ・自己発揮の必要性
 ・見守りの必要性
 ・導きの必要性
 ・自己抑制の必要性
 保護者のみなさまへ
 地域と共生しながら子どもたちを育てたい



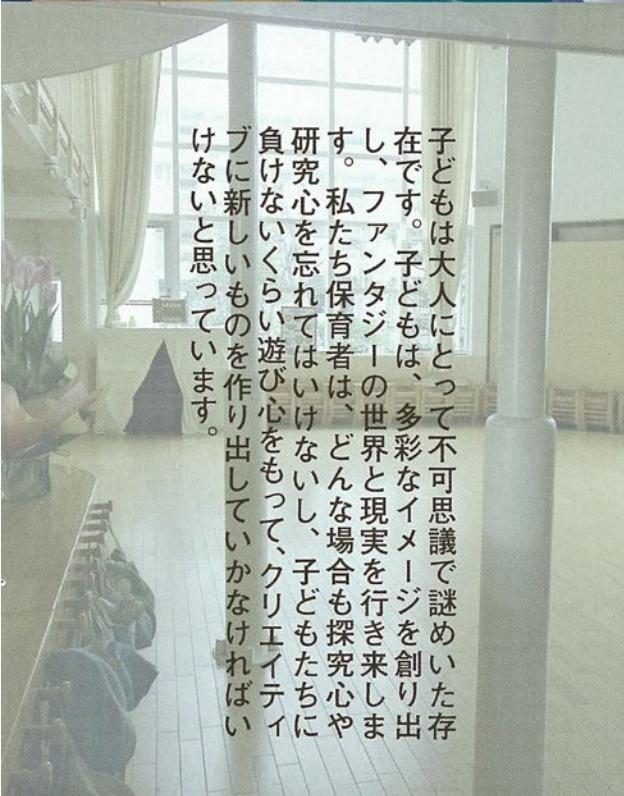
「保育に一生をかけて関わっていくことが自分の天職だったんだろう」、幼少期から様々な体験を思い起こすと、今になつて私はそう確信します。少し奇妙に思われるかも知れませんが、私は、自分が2歳だったときに弟が産まれたときの状況も、3歳頃の出来事やその時々の自分の気持ちも鮮明に覚えていて、單なる言葉ではなくて、こそ、今、子どもたちと接していく、「子どもはこういう状況では、こういう気持ちになるんだ」ということが容易に理解できるのではないかと思っています。

この冊子を創るにあたつて、自分の生き立ちを語るなど、おこがましいことだと思いました。しかし「私が、法人設立者として、園長として、どういふ想いで子どもたちに関わっていこうとしているのか」それについて、單なる言葉ではなくて、どう考えるまでに至つた経緯、生まれ育つた人間的な背景から包み隠さずお話をし

5分後には仲良しになります。私が男性であります。「保育士」という仕事を選んだのは、この神秘的な世界をどこまでも探求したくてしかたがなかつたからです。神戸で保育の仕事をはじめたとき、男性保育士（保父さん）は一人もいなかつたと思います。周囲から見れば「めずらしい人だねえ」ということになります。周囲から見れば「めずらしい人だねえ」ということになります。私は、宇宙に探求に行くのと同じぐら

子どもを育てる ◇ 考え方

子どもの本当の気持ちを知るために
導きながら見守ることの大切さ
主体的に行動できる子どもに



子どもの本当の気持ちを知るために

たとえば、壁にあるシミを見つけて「お化け〜?」と感じたり、暗がりで星を見ていたら、自分が宇宙人になつたような気がしてわくわくする。大人も自分の小さかつたときのことを思い返せば共感できると思うのですが、なかなかそうはないかないようです。子どもの心は可塑性が高く、不完全さを保ちながら健全に成長していきます。

私たち保育者は「教育する」「指導してあげる」などという驕った感覚を抱いてはいけません。「子どもは自分自身の内に育つ力をもっている」。だから保育者は、その育つ力を信じて、見つけ出して、引き出すことが勤めです。子どもに負けないぐらい的好奇心や探求心を發揮して、保育環境を作り出したり活動のアイデアを提供したり





すべての活動において、私は「大人が立案した『ねらい』に沿って子どもをみちびくことが、基本である」とは考えません。それぞれの子どもが興味をもって参加できるように活動内容や展開方法に工夫を凝らすことが「導き」の基本です。その際、子どもたちが想定外の動きをした場合、それを認め受けとめることが「見守り」の態度です。そこで、その時々の状況にあわせて柔軟に内容を変更していくこと、これも「導き」なのです。一方、自分が選んだコーナーやエリア、あるいは園庭での遊びにおいて、ただ傍観していることが、見守りではありません。個々の子どもの必要に応じて援助していく行為が見守りです。「導きのない見守りはない」。逆に「見守りのない導きもない」と表現して良いと思います。

たとえば紙飛行機を作つて飛ばして遊ぶ場合、素材（紙の種類）と作り方について、いろんなアイデアが出てきます。あえて、異なる素材と複数の見本を紹介して、みんなの興味や関心が「紙飛行機づくり」の方に向かっていくようにはたらきかける。つまり、みんなが色々と試せるように多様に準備することを「導き」と捉えます。そこでは、いろんな姿を引き出すことができます。子ども自身のアイデアで色を塗ったり、台を持ってきて、そこに上つて飛ばしたり、園庭に出て、滑り台など高いところに上がって飛ばそうとする姿、これを認めていくことは「見守り」です。

さらに、運動会のお稽古を例にとってみましょう。組体操を18人で行うとして、3人のチームを6つ作

ります。3人のうち2人がしゃがみ、1人が2人の上に立つて塔をつくります。一般的には、運動会当日の形をくりかえしお稽古しますが、それは保育といえません。私たちの場合、そこで「シャツフル」と声をかけると一瞬にして18人が散り散りになつて新たな3人組をつくり、同じように塔をつくる。この間、保育者は何も言いません。悪い例は「あなたは下でお馬さん、あなたは上に乗る」と指示してしまうこと。これはもう保育ではありません。あくまでも、子どもたちに委ねること。子どもたちが相手を探し、相談しながら、戸惑つたり葛藤したりする。その経験が大切なのです。自分が上がるか下になるのはその時次第です。それが運動会当日の見所になります。例えば、17名なら、1名足らず、2名が余ってしまいます。過不足の体験もあります。実際、瞬間に、余った2人は、見ている1歳年下の子どもを連れてきたり、



2人だけで別の形をつくることもあります。ここに子どもの豊かさ、保育のおもしろさがあるのだと思います。

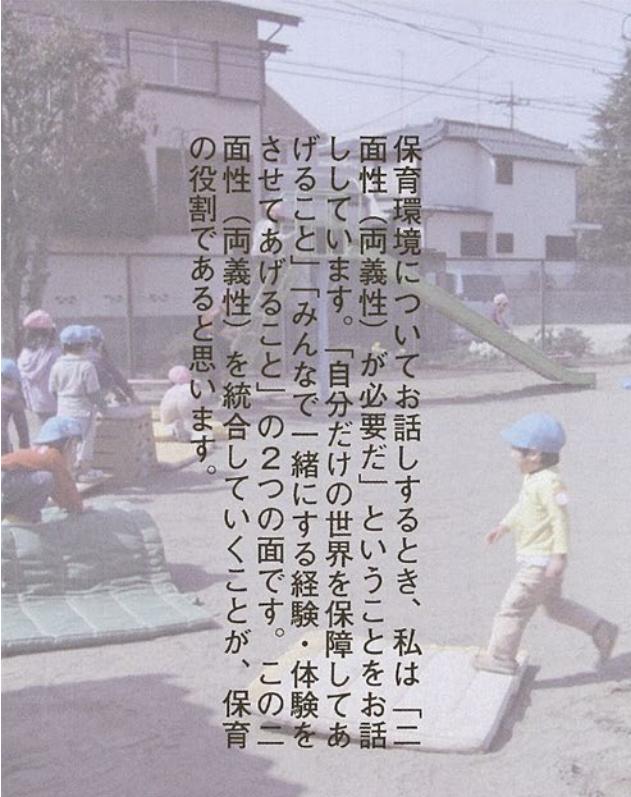
保育士がすべて指示してやらせるのではなく、子どもたちだけで自由な形をつくるということでもあります。保育者が導き（塔という形の提案）ながら、見守つて（役割を個々に任せること）いきましょう、ということです。このような「導き」と「見守り」のなかで、子どもたちと保育者の間の信頼関係は深まるのではないかと思っています。



子どもを育てる

◇環境

自分の選んだコーナーで遊ぶ
異年齢で活動する時間もあります
サー・キット運動を毎日しています
自然のもの、本物にこだわります



自分の選んだコーナーで遊ぶ

朝、登園してきた子どもたちは2時間ぐらいの間、読書をしたい子、ごっこ遊びをしたい子、ゲームをしたい子など、それぞれ自分が選んだコーナーやエリアで遊びます。「一人遊びは異年齢で行っています。異年齢というよりも「気の合う者」というほうが正しいです。4歳児の3月生まれと、3歳児の4月生まれが仲良く遊んだり、5歳と3歳とが発達の違いをこえて一緒に遊んだり、また、ひとりで遊びに没頭することもあります。その子どもの選択に任せることは、自発性を促し、情緒の安定や主体性を育む上でとても大切です。なかには、「今日はこの遊びをして、明日はこれをしよう」「明日も続きをしよう」と自分で考へて見通しを持つ子も出でてきます。しかし中にはあやとりや園庭の竹



馬のように、ただポンと置いておくだけでは、全くふれない場合があります。そこにはやはり保育者の導きが必要です。4歳、5歳になると課題意識を持ちはじめるので、「がんばり表」を作ることもしました。「あやとりで富士山ができる一枚」「台の上での竹馬ができる一枚」というようにシールがもらえます。すると子どもたちは、はじめはシールを増やしたくてがんばるんですが、

やがてこの遊び 자체のおもしろさに引き込まれます。この方法は「子どもを追いこむのではないか」という懸念や批判があるのは承知しているのですが興味を示さない子に対して「がんばりなさい」と、追い込むことはありません。友達どうしでも言いません。あくまでも、気づきをあたえたり、チャレンジする気持ちのある子にきっかけを与えてあげる「導き」が必要だということです。

異年齢で活動する時間もあります



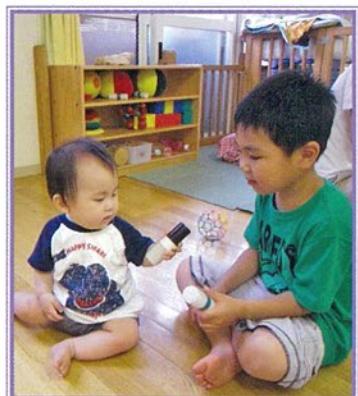
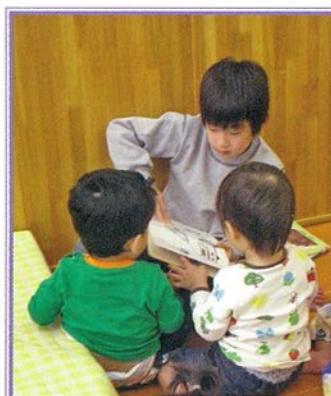
みんなで一つの成果を得るための活動は、年齢の近い子で構成されたクラス別で活動するほうが望ましいと考えます。しかし、「コーナーやエリアでの自由な遊びの他に、リズムやごっこなどのテーマのある活動も異年齢で行う」とあります。年少児は年長児たちから刺激を受けて、どんどん活発になってしまいますし、年長児は年少児に一生懸命伝えようとすると姿も見られます。こういう経験は保育園だからこそできると思います。

あるときは年齢ごとのクラスの仲間と、そしてあるときは、異年齢の気の合う仲間と一緒に遊びを選んだり、異年齢でありながら、同じテーマで一斉活動をして過ごす、まさに、縦、横の関係をバランスよく立案していくというのが、私たちがこころがけている保育の方法です。

サークル運動を毎日しています



「サークルの時間ですよ」という合図がわりに音楽を流し始めると、子どもたちはどんどん動きまわります。今まで何もなかった園庭や遊戯室に急にいろんな遊具が出てきます。園庭の滑り台はこの時間だけ逆から登ってみたりします。大人なら2周もすれば飽きてしまうかも知れません。でも子どもたちは「動きたい」という生理的欲求がたくさんあります。大人が想像する以上に子どもたちの体力＝運動意欲はあります。乳児特有の感覚が在ります。「この音楽でサークルスタート。この音楽が流れたら部屋に戻る」ということをくりかえすと言葉の指示がなくても、自然に理解して行動に移します。同じ順番で音楽を流し、決まった曲で終了するという基本を崩さないこと、これは自律を促していると同時に意欲を維持する上で大切なことだと考えています。



長年、幼児体育に携わってきた私は、日々感じる仮説があります。「身体機能を高めることによって身体的なバランスが良くなると、精神的にも自分をコントロールする力が備わるのではないか」という説です。そこで、乳児の頃から「サークル運動」を毎日行うことになりました。遊具を組み合わせ、滑り台や坂を設置したり、平均台やマットなどを並べて周回コースをつくり、みなで何周も繰り返します。「今から

また、サークル運動中に音楽を流すのには理由があります。乳児には、乳児特有の感覚が在ります。「この音楽でサークルスタート。この音楽が流れたら部屋に戻る」ということをくりかえすと言葉の指示がなくても、自然に理解して行動に移します。同じ順番で音楽を流し、決まった曲で終了するという基本を崩さないこと、これは自律を促していると同時に意欲を維持する上で大切なことだと考えています。

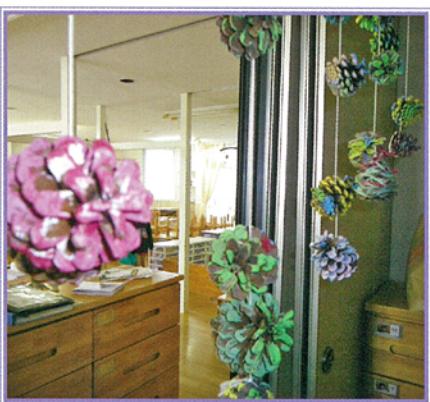


自然のもの、本物にこだわります

一日の大半をすごす保育園の室内環境については、できるだけ季節感のあるものを置いて、落ち着きをあたえたいと心がけています。まず、「自然のもの」、「本物」に触れさせていたいことがあります。花や緑など、植物を身近に感じてもらうために、室内装飾一つにしても、松の枝や葉っぱ、どんぐりなど、本物の材料を使ってオブジェを作つてみたり、写真を飾る枠を作つたり。そ



れらはいつも子どもの目に触れる場所においておきます。いつも同じ場所に同じようなものがあることは、子どもたちに安心感を与えます。そういう感覚って、私たち大人にもありますよね。個々の保育者がそのような感覚を抱き、保育者集団の共通



テーマとして意識して、園全体で取り組まなければ季節感のある環境づくりはできません。

また、最近は、雑菌などに過敏になると捉えます。「コーナー」やエリアで遊びを選ぶこと自体が主体的だと言えます。また「保育者主導」と揶揄されやすい一斉保育であっても、サーキット運動のように生き活きと主体性を引き出せたり、同年齢集団、異年齢集団、と属する集団の質を変えられることも環境の多彩さだと考えます。私は、コーナーやエリアの環境を整える大切さと同等に、子どもたちが主体的に取り組むことができるような「時間や期間をかけたテーマ保育」あるいは「プロジェクト・アプローチ」(テーマを投げかけて実践していくうちにどんどん変容していく保育)といわれる保育を大切にしたいと考へています。クリキンなどは、最初は保育士がていねいに伝えますが、その後は、子ど

主体的に行動できる子どもに



「環境を通した保育」を私は、主体的に行動できる力を養う保育だと捉えます。「コーナー」やエリアで遊びを選ぶこと自体が主体的だと言えます。また「保育者主導」と揶揄されやすい一斉保育であっても、サーキット運動のように生き活きと主体性を引き出せたり、同年齢集団、異年齢集団、と属する集団の質を変えられることも環境の多彩さだと考えます。私は、コーナーやエリアの環境を整える大切さと同等に、子どもたちが主体的に取り組むことができるような「時間や期間をかけたテーマ保育」あるいは「プロジェクト・アプローチ」(テーマを投げかけて実践していくうちにどんどん変容していく保育)といわれる保育を大切にしたいと考へています。クリキンなどは、最初は保育士がていねいに伝えますが、その後は、子ど

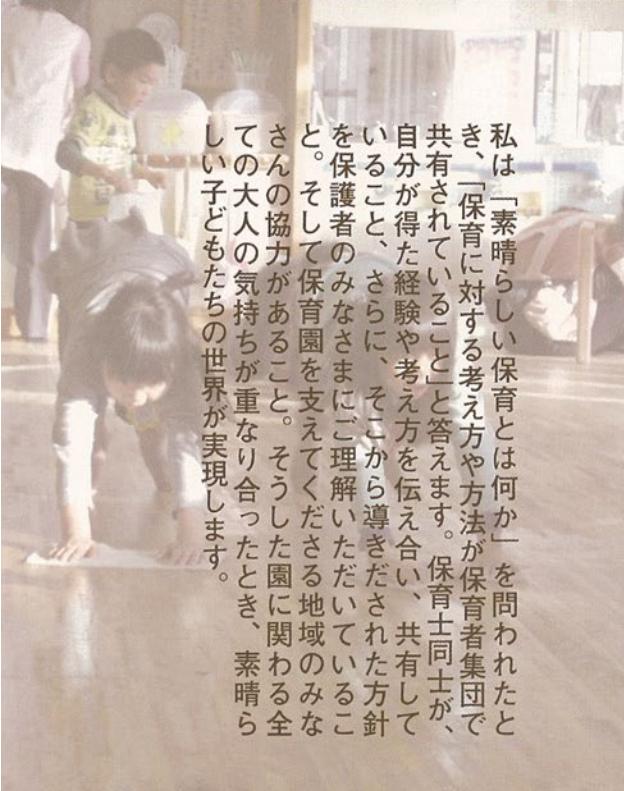
もたちだけでやりきれるように何度も同じ取り組みをします。回を重ねると、「これは私がやる」「こっちはぼくがやる」と子どもたちは役割を決めながら、最後は、「自分たちだけでやりきった!」という達成感を味わいます。そして、買い物物から準備、片付けまで自分たちだけで行えるようには保育に見通しを持つことも主体性を育む上で大切なことです。

保育は、「保育者が子どもを認めると同等に子どもが保育者を認めること」で成り立ちます。それがはたせてこそ、「子どもたちどうしが認め合える」ようになります。自分が保育者から認められ、自分以外の人ことを素直に認めることができる、それも主体性の育ちです。「相手を認めることが自分も活かされることだ」と個々が気づけるような保育実践をめざしたいと思います。



大人たちの責任

保育士のみなさんへ
保護者のみなさまへ
地域と共生しながら子どもたちを育てたい



保育士のみなさんへ①（自己発揮の必要性） 「同僚性」と「応答性」のもとでみんなが自己主張を

保育園の保育はチームで行われます。保育者の保育観や保育スキルにばらつきがあることは何としても避けたいことです。保育者集団のチームワークを如何に育むか、最優先課題として、このテーマに真正面から挑まなければなりません。チームワークが機能すると、保育の課題はおのずと保育者の内側から沸き出て、自分たちが解決の担い手であるという認識もなされます。

「園長と保育者集団の関係」や「保育者同士の関係」は、「保育者と子どもたちの関係」、「子どもどうしの関係」と相似形です。朝早くから方遅くまで開園し、ローテーション勤務をする保育者間の情報共有、意見交換の手立てとして、ネットによる掲示板（マーリングリスト）での書き込みを実施していますが、この

しづみを最大限に活かす努力を求めます。全体会議、児童会議、乳児会議、ケース会議、研究保育その他、気づきや提案を、より多く自己主張（全体発信）することが保育者として評価に値するという職員文化を打ち立てます。フェイス・トゥ・フェイスの話し合いとパソコンメールによる全体発信をし合つことによって、「同僚性」や「応答性」の関係を育み、保育者集団全体の資質向上を図つていきたいと考えています。



私は「素晴らしい保育とは何か」を問われたとき、「保育に対する考え方や方法」が保育者集団で共有されていることと答えます。保育士同士が、自分が得た経験や考え方を伝え合い、共有していること、さらに、そこから導きだされた方針を保護者のみなさまにご理解いただきたいということ。そして保育園を支えてくださる地域のみなさんの協力があること。そうした園に関わる全ての大人の気持ちが重なり合ったとき、素晴らしい子どもたちの世界が実現します。



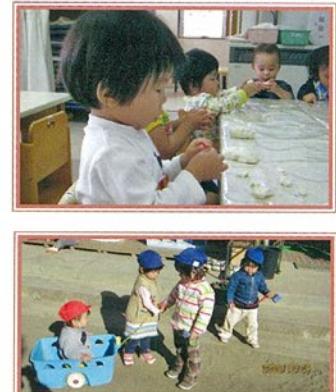
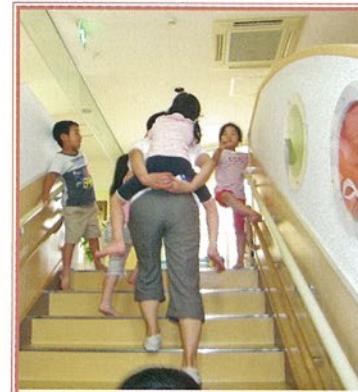
保育士のみなさんへ③（導きの必要性）
保育士はエンターテイナーでもあらねばならない

私たち保育士の力量ってどこで量ることができるのでしょうか。「子どもの気持ちを汲み取り、見守ること」。これはとても重要ですが、それだけなら親や心理学者でも可能なことです。これに加えて「子どもたちに愉悦感をあたえながら、意図したところに導く力」、この両輪のバランスが大切です。とかく「見守る力」や「寄り添う姿勢」の大切さだけが強調されて、「導く力」は子どもを強引にひっぱる悪しき力と誤解されがちですが、児童の特性を理解して集団保育を実践する場合、「子どもたちの興味や関心を引き出して導くこと」は保育士固有の専門性だと捉えます。そういう意味で「エンターテイナー」としての力量が必要です。その力を高めるためには、「うまく導けなかつた体験」を宝物と捉

えて振り返り、そこから子どもどもうものを再度発見し、その年齢の子ども集団の指向や傾向を知っていくしかないかもしません。「エンターテイナー」であるためには、ハウツー本を含めて様々な本を読んだり、演劇や美術を鑑賞して自分自身の感性を豊かにすることが大切です。また、一人の保育士から生み出されたアイデアは、ほかの保育士全員と分かち合ってほしい。そうすることで、互いに高め合い、また新しいアイデアや深い見方を生み出せる土壤をつくります。保育全体を分かち合うような保育者集団の風土の中で個々の「エンターテイナー」としての力量は高まります。「エンターテイメント」を個人の所有物にしないで、全員の共有物にしていきましょう。



「次世代を担う子どもたちを育てる」。保育関係者がよく使う文言です。しかし、誤解を恐れずに言うなら、私は、次世代を育む仕事などできないと思います。この仕事は子どもを通して自分自身が豊かになることができます。それが子どもを育むことにつながります。愚直さや純粋さなど豊かな自分づくりのために必要なことを子どもたちはおしえてくれます。子どもを見守り、寄り添う保育実践によって、他人を許せたり、思いやりが深まったり、人格を高めることができます。逆に子どもに寄り添えないなら、子どもたちと関わりながら、自分自身の内面を見つめ、気質や処世観までも課題として、向き合って、自己浄化のために乗り越えなければならぬと思います。





「子どもっぽい」という言葉は、大人社会では「分別が足りない」という意味合いでよく使われます。しかし、分別やメンツがあるためにトラブルを解消したりしているのは、大人（社会）です。子どもどうしは子どもっぽい故にケンカの後、

ちょっとと詫びただけですぐに和解できます。不思議です。子どもの心には柔軟性があります。乳児では、友達を噛んでしまった後、5分も経たないうちに何もなかつたように仲良しに戻っていました。大人が同じような状況になつたら、未來永劫、口を利かない関係になりますよね。子どもの心の中には、トラブルを起すリスクと表裏の関係で仲間意識や許す気持ちが存在しています。子どものトラブルを大人の感覚で捉えてはならないと思います。確かにわが子が噛まれてしまったら、良い気持ちはしないと思います。もちろん噛み付きが起きないよう極力気をつけます。でも、その子も、ほんの一瞬辛かつただけで、そのあとの時間はずっと楽しく過ごせるのです。

幼児のケンカも同様です。そこで大人が過剰に反応してしまっては、子どもはそんな親の姿に気遣つて、心の柔軟性も子どもしさも壊されてしまします。乳幼児の場合、特殊なケースを除いて、子どもどうしのトラブルの大半は、子どもが傷つく以上に親心（自分）が傷ついています。乳幼児の場合は、親心（自分）が傷ついて受けとめることも必要です。「何の争いもない状況」がこの世のどこにも存在しないように、保育園という社会の中でもいろいろなトラブルやアクリシデントが起きます。そのリスクをすべて排除することよりも、しっかりケンカして、自己主張し合って許し合える。そんな経験の積み重ねが、陰湿なイジメの防止策になり、将来、困難な状況を乗り切るうえでたいそう価値のあることになります。

保護者のみなさまへ① 子どもどつしの世界を見守りましょう

子どもを健全に育むためには、また、本当の信頼関係を築くためにも、叱ることは必要です。しかし、些細な事で執拗に叱つたり、逆に注意が必要なときに口先だけで叱つてあいまいに見逃す場面もよく目にします。「叱る」ということは感情的な「怒り」を自己抑制しながら行わねばなりません。ですから、「ダメでしょ！」ではなくて「どうしてそんなことしたの？」と子どもを演じる時は「叱る」ということをみながら具体的に問います。萎縮させることができることが目的ではないはずですが、「子どもを叱る時は『叱る』こと自体が苦手だよね」などと、最後には感情をコントロールしながら意図して強い口調になつてもかまいません。そして叱つたあとには「ちゃんとできるはずだよね」などと、最後に子ども自身に訴えることが必要です。「叱る」という行為を、真剣に向き合つたコミュニケーションの場面で

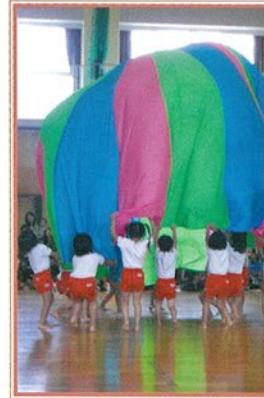
あるという捉え方を私はしています。乳児に叱ることは厳禁です。「言つて聞かせるのではなく「お願いする」言葉がけがとても重要です。「褒める」とともに叱る場合と同じです。口先だけで「すてきー」なんて言つてもあまり心に届きません。「こんなところがすばらしい」「こんなふうにすごいね」と具体的な内容を添えながら、気持ちを込めた言葉で共感します。そのとき、子どもたちは、本当に自信に満ちたすばらしい表情を見せます。このようなやりとりのながら、大人（社会）との信頼関係が育まれると思います。「叱る」ことも「褒める」ことも心くばりが必要な大事な関わりです。結果として、その後に素直で晴れやかな気持ちになつたり、いわゆる自己肯定感を味わえるようなものにならなければ、決して育ちには至りません。



感情に任せず、叱る」とを心をこめて演じる？ 保育士のみなさんへ④（自己抑制の必要性）

保護者のみなさまへ② 「できるできない」は、色が違うだけです

私は運動会や発表会で最初のあいさつをするときに、「うまくいく子もいるけれども固まってしまう子もないかも知れません。でも、固まってしまう子は、感受性が豊かな子でもあると評価します。だから、うまくっている子も、うまくいかない子も見える形は違うけれども、大勢の人々に見てもらうという点においては、みんな一様に良い経験をしているんだ」とお話をします。その子の児童におけるカラーの違いです。赤が青よりも優れているということ



てないでしょう？　できる、できないは色合いが違うだけです。結果の姿ではなくて、結果に現れることを経験することに意味があります。友達関係のなかでは、「リーダーになる子もいるし、ついて行くだけの子もいるでしょう。自己発揮できたり、できなかつたり、「主役になりたかったな」という子が、その思いを持ったまま卒園することも値打ちがあります。その思いが後々エネルギーになります。その思いが後々エネルギーになることもありますから。保育園時代に行事などでどんな姿を残したかというよりも、どれだけの数の経験をしたかと、このことに重点を起きたいと考えています。だから保育園では、発表会も運動会もするし、お誕生会では大勢の前で語ったり、お泊り保育もあつたり、自己発揮する場ができるだけたくさん提供するようにしています。

保護者のみなさまへ③ お互いに支え合っていきましょう

保護者のみなさんはそれぞれの考え方があり、育て方がありますから「園の方針に合わせてください」というようなお願ひをするつもりはありません。そうではなくて「お互いに支え合っていきましょう」という気持ちを強くもっています。支え合っていくために、私たちが考える園の方針や理念を「わが子にとってどうなのか」と考えていただきたいと思っています。支え合ったためには、意見交換が大事です。「育儿相談」というような大層なことではなくても、ひとりひとりの保護者のみなさんの考え方や、それぞれのご家庭でのお子さんの過ごし方を知って分かち合いたいと思っています。

お互いにその子どもを理解し良い方向に育もうという目的に向かって、「こういう場合はこうしたほう



がこの子のためかな」と話し合つたり、「どのような関わり方をするとが望ましいのかな」と考え合つたりしながら、最善の方法と一緒に探つていけるような関係になれたら、こんなに素晴らしいことはないと思っています。



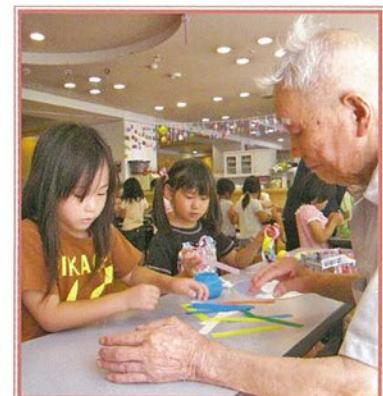


地域と共生しながら子どもたちを育てたい

ある日、保育園に来たら、周囲の草がきれいに刈ってあってびっくりしたことがあります。そして、郵便受けを見たら、「雑草がすごく垂れていたので、誠に勝手ながら自分たちで刈らせていただきました」と老人会のみなさんからメッセージがありました。もう本当に頭が下がりました。今でも、その園の周囲の草刈りは、老人会のみなさんが行っています。また、園でお預かりしている支援の必要な子どもたちには、一对一で関わる大人が必要です。地域にお願いをして、「有償ボランティア」を募ったところ、たくさんの方が来てくださいました。私たちもしていただけではなくて、園にあるものを「行事で使いたいので貸してください」といわれれば、

喜んでお貸しましたし、地域のお祭りや催し物には常に参加しています。参加して一緒に楽しんだり、困った時にお互い助け合ったりという関係の中で、地域のみなさんが「この保育園のことを支えてあげよう」、私たちは「地域の子育て支援を担おう」という相互の関係が深まるところでうれしいです。

私は、運営理念として「みんなで、みんなを見る園づくり」という言葉を掲げています。園の保育者が園児だけをみていいればいいというスタンスではなくて、地域のボランティアの人たちを含めた大人たちが、園児だけでなく、地域の子育て家庭全体を見ていく、その中⼼的な役割を担いたいと願っています。そうすれば、園でも地域でも、子どもたちの笑顔が満ち溢れると思うのです。



最後に……

私は、学生時代に、「子どもの自主性を尊重することと協調性を求めることは相反するのではないか」と当時の園長先生に訴えたことがあります。そのとき、「とてもいい質問だが、今の君には、その答えはわからないだろう。もっと経験を積めば、必ずわかる時が来る」と先生には諭されました。ときが経つて、今、少しその答えが見えてきた気がしています。自主性を尊重することと、協調性を求めるることは、相反することに見えます。だけどそれは実は表裏一体だということなんです。

世の中の理として
世の中一番対極にあるものが一番近いのではないかと思いません。
見守ることと導くことも同じです。

保護者と保育者も、もしかしたら対極かもしません。
だとすれば、保護者と保育者は一番近い関係でもあるのです。
子どもからみると、自分を委ねられる相手といふことで、
家庭では保護者を、園では保育者を、
一番頼りにしているのですから。

だからこそ保育を協働したい。
その想いからこの本が生まれました。
ぜひ、みんなが支え合って、わかちあって、
素晴らしい子どもたちの世界を実現していきましょう。



種 の 会



発 行 社会福祉法人種の会
住所：〒657-0855
神戸市灘区摩耶海岸通2-3-14
本部 はっと保育園内
発行日 2010年3月